紀伊・房総

くろしお物語 ◇37◇

鯛漁の御菜浦富津漁港

絵と文・熱田親憲　題字・熱田秦華

桂網イラストと鯛釣り人

東京湾沿いのJR内房線の富津駅が最寄りの富津漁港は現在2カ所に分かれ、北側の富津地区は潜水器漁とのり養殖が盛んで、春先から夏にかけて潮干狩りでにぎわっている。南側の下洲地区は、のり養殖で生産量千葉県1位の本場である。

江戸時代にさかのぼると、1623（元和9）年、紀州（湯浅町栖原）の漁師・栖原角兵衛が、鯛漁の桂網漁を安房国長狭郡浜荻（鴨川市）から館山地方へ試み、ついに内湾を北上して上総国天羽郡萩生村（富津市）に落ち着いた。彼は当地に桂網漁業を広め、鯛の水揚げが上がり、周辺の人々に大いに喜ばれ、外房・内房沿岸に鯛の漁場を拡大し隆盛となった。

桂網の漁法は紀伊国有田郡のある漁民が考案したという大規模な旧式漁法である。ぶり縄という大縄に木片数百を取り付け、それを地引網で囲んで漁獲する漁法で、7艘の船に40人以上の人員を要する。桂網漁法は野猿が葛のつるを持ってオタマジャクシをとらえることからヒントを得たということから「かずら網」と呼ばれ、船をおろすときは必ず「申の日」に行い、猿の好物とする椿の当たり年は豊漁である――など、猿にちなむ伝承がある。

男のロマン「桂網」

1700（元禄13）年、二代目栖原角兵衛は萩生村名主斉藤三郎左衛門に網船と諸道具、納屋共一式を120両で譲渡。桂網は地元主導の鯛漁となった。獲り過ぎを心配する幕府の抑制策で、競合する近隣の村の漁場の中から、萩生の桂網だけが残され、「御菜浦」と指定され（1762年）、将軍家のご用達に務めた。操業には「御用」の旗を掲げたという。

しかし桂網をめぐる紛争は絶えなかった。桂網を漁場荒らしとブーイングする上総、武蔵、相模三カ国28カ村、漁具破損の漁師同士のトラブル、公儀御用を命じられた魚問屋と休漁中の萩生村桂網漁との押し問答など、江戸末期まで続いたようだ。

1877（明治10）年ごろ萩生宴魚村の地元の人々によって再び桂網が運営されるようになった。明治、大正、昭和と続き、太平洋戦争で一時中断されたが、戦後復活された。大正から昭和初期生まれの漁師は、子供のころ内湾で獲れたピンピン跳ねている鯛を歓喜の笑顔で東京に納品する大人の勇姿をみて魚屋、漁師になった方が多かったとのこと。当時佐貫八幡に居住されていた歌人が、桂網の賛歌を歌ってくださった。

うな潮を紅にして華々しく　鯛はあがれり
はねはねあがれり
しめやかに春雨けむる竹岡に　鯛網見んと
妻もゐて来し

桂網には文明開化による男のロマンと時代の流れを感じさせられる。